

ろ山上の湖水に適合してゐるが、この一事を除けば、他の資料は皆この建物が迦膩色迦王に關係ありと云ひ傳へられる建物に一致することを證明してゐる。先づ其の入念を極めた構造と云ひ、列柱の様式と云ひ、面積と云ひ(圓形礎石の脚部で計る周圍は七十五米突以上)、總てアフガニスタンで見ると最大且つ最古の佛堂に屬するものであることを證明して居る。又、奥深い谷間から出る奔流の出口に當り、巨大な岩石が雜然と轉落して古代の大洪水を想はせる一大圓錐丘の上に位置すること、特に、此の建物が附近に比較のない程のもので、土地の人々があれだと云ふものは唯これ一つであることなど、から考へても、此の建造物は今後の調査上最も重要な地位に立つものである。

Kapisa, Nagarahāra 間——カピシヤ地方に百ヶ寺内外とせる中、立辨法師は只だ七八ヶ寺を記録に留めたばかりで、早速その願望の地たる印度方面に急ぎ、遂に其の國境に到着し、それより愈々印度に入國する爲一連の山を越え谷を渡りて東進せり……」と記述せるが、是より先づ南進してカーブールに至らなかつたことに就ても亦恐らく奇異の感を抱く者が多いであらう。何故かと云